

奈文研

ニュース

No.33

NABUNKEN NEWS

Jun.2009



独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条西2丁目9-1
<http://www.nabunken.jp/>

平城資料館の改修

現在の平城資料館は、1970年に当時の平城宮跡発掘調査部の庁舎だった建物を改修してオープンしました。その後、1987年の展示改修を経て現在に至っています。展示改修後にもいくつかの手直しをおこなうとともに、新しく製作した模型も追加して展示しています。

今回、来年度の平城遷都1300年記念事業の実施に伴って、資料館の全面的な展示改修が計画されました。改修に当たっては、これまで以上にわかりやすい展示を目指すこと、平城宮跡の西のエンタランスゾーンとして、平城宮跡のガイダンス機能を中心とすること等の基本的な考え方が示されました。この基本構想に沿って計画した概念図を元に、2009年度に施設整備費として改修の予算が計上され、具体的に計画が開始されました。

2008年度中に展示委員会のワーキンググループが数回開催され、具体的な展示構成案がまとまりました。本紙面を借りてその概要をご報告します。

まず資料館への入口をこれまでの北側から南側に変更するとともに、動線を一本化しました。この変更に伴って、入口前に大きなシンボルサインを設け入口を明示するようにしました。また館の東側にはウッドデッキを設け、椅子やテーブルを設置して大極殿や大仏殿の屋根などを眺めながらくつむかって眺望を楽しんでいただけるように工夫しました。



官衛(役所)の復元(イメージ)

ガイダンスルームには発掘調査の模型を設置とともに、大型ディスプレイで発掘調査から復元された平城宮跡の姿をVR映像で紹介することにしました。VR映像は任意の位置や角度から眺めることができ、オペレーターを置いて、様々な角度から復元平城宮を眺めていただきながら解説をおこないたいと考えています。

展示のメインは官衛(役所)と宮殿の復元ジオラマです。わかりやすい展示を目指し、まず当時の平城宮にあったであろう官衛と宮殿の内部を、正倉院宝物の復元品を置いて再現する予定です。最後のコーナーでは都城調査部のある研究室を再現します。中央に実測道具の置かれた古い机を用意します。机の左右の壁面を利用して、土器と瓦を年代順に展示し、それぞれの移り変わりと、遺物に対する研究を表現したいと考えています。反対側は壁全体をケースとし、木簡や人形、工房遺物などテーマごとの展示をおこないます。

展示を出たところには、ミュージアムショップを拡大設置します。中庭は現在の復元庭園を踏襲しますが、若干規模を縮小するとともに周囲を板塀で囲って、復元庭園としての眺望により配慮した構成にしたいと思います。

6月休館後の作業は時間との闘いになります。皆さんのご理解とご協力を願っています。

(企画調整部 杉山 洋)



宮殿の復元(イメージ)

発掘調査の概要

古宮遺跡の調査（飛鳥藤原第152～8次）

古宮土壇周辺は、推古天皇の小墾田宮と推定されていた場所のひとつで、1970年、1973年に発掘調査をおこなっています。その結果、古宮土壇は平安時代のもので、小墾田宮とは直接関わりのないことがわかりました。ただ、7世紀前半代の石組池・石組溝や掘立柱建物がみつかり、周辺は7世紀代から活発に土地利用されていたようです。

今回は、古宮土壇の南西を調査しました。調査地のすぐ南に県道桜井樅原線がとおり、ここが古代の官道である山田道をほぼ踏襲すると推定されています。飛鳥川の西岸では山田道に関する遺構は確認されておらず、位置や規模、造営時期についてはこれまでしきりしていませんでした。

調査の結果、3条の東西溝を検査しました。調査区の南を南東から北西に横切る素掘溝は、1973年の調査で見つかった7世紀前半代の溝と一連になる可能性が高く、また溝の南側が整地されていることから、この溝が7世紀代の道路の北側溝であったようです。その後、奈良時代～平安時代前半に再度整地して7世紀の溝を埋め、素掘溝がつくられます。3つの東西溝も、この整地の後に、先につくられた2条の東西溝の北側に設けられた素掘溝です。

調査区周辺には「日本書紀」に「豊浦寺の前の路」として山田道があらわれます。今回みつかった溝が山田道か、それに先行する道路側溝の可能性が高くなりました。飛鳥川の西岸でもついに古代の山田道が姿をあらわしてきたのです。

（都城発掘調査部 木村 理恵）



調査区全景(北から)

檜隈寺周辺の調査（飛鳥藤原第155次）

檜隈寺は、キトラ古墳の北西約600mに位置する丘陵の先端部に建てられています。渡来系の東漢氏の氏寺と考えられており、「日本書紀」の記事から、朱鳥元年（686）には現在の地に存在していたことがわかっています。1979～82年におこなった調査では、金堂・講堂・西門・回廊などが確認され、西を正面とした珍しい伽藍配置をとっていることが判明しました。また、塔跡には平安時代に建てられた十三重石塔が今なお残っており、重要文化財に指定されています。

今回の調査は、キトラ古墳周辺の国営歴史公園の整備にともなうもので、檜隈寺の周りにどのような遺構が存在するのかを明らかにするために実施しました。その結果、主要伽藍の北東、丘陵東斜面の裾部分で南北棟の掘立柱建物と東西塀を確認しました。これらの建物と塀は、柱筋が檜隈寺の伽藍主軸と同じ方向を向いていることから、寺の主要伽藍と同じ時期に造営された施設であろうと考えています。また、これらとは別に、丘陵裾を取り囲むようにめぐる南北塀を2箇所で確認しました。現在のところ、この南北塀は、寺域の東限を示す区画施設ではないかと考えています。

今回の調査では遺構の一部を確認しただけで、その規模や性格などを確定できていませんが、丘陵裾部に寺院関連施設が存在していたことがわかり、檜隈寺が丘陵全体を寺院地として利用していたことが判明しました。本年度に実施する本調査で、檜隈寺の全体像が明らかになるのではと期待しています。

（都城発掘調査部 若杉 智宏）



丘陵裾部の掘立柱建物と東西塀(西から)

平城京右京三条一坊八坪の調査（平城第448次）

いよいよ平城遷都1300年祭の開催も近づいてきましたが、現在㈱積水化学奈良工場にあるグラウンドの中に、平城京歴史館（仮称）なる展示施設が建てられることになりました。そこで、その事前調査として、今年の1月から3月にかけて発掘調査がおこなわれました。調査面積は約1,100m²です。

まず、グラウンドの盛土と旧耕作土を除去したところ、調査区中央において護岸杭列をともなう池の痕跡を検出しました。この池の中からは大量の建築廃材とともに、看板や瓦などの中から、米軍に関連する遺物も出土しました。

調べてみると、この池は1929年にこの地に設けられた奈良地方競馬場に関連する施設である可能性の高いことがわかりました。奈良地方競馬場は1940年に現在の奈良競輪場へと移設され、その後、太平洋戦争中には興亜機械工業なる軍需工場が建設されていたようです。そして終戦後、軍需工場を米軍が接收し、当該地にグラウンドを敷設しました。したがって、この池から出土した廃材は興亜機械工業の建築廃材と考えられ、基地施設を造営した米軍によって投棄されたものと考えられます。

この池が造られた影響を受け、調査区内で検出された奈良時代の遺構は、調査区東側と北側にかろうじて残っているという状況でした。

調査区東側では、南北15m、東西5mにわたるL字状の溝とその周囲に広がる瓦溜まりを検出しました。L字状の溝の内外では整地の状況が異なってお

り、内側の整地土には瓦が多く含まれています。そして、溝の内側では柱穴などの遺構は検出されませんでしたが、様々な状況から類推すると、これは基壇建物の痕跡を示している可能性が高く、溝は基壇外装の抜取痕であり、内側の整地土が建物基壇の積土に相当すると考えられます。柱穴などの痕跡が見つからないのは、基壇そのものが大きく削られてしまったためでしょう。

調査区北側においても、東西20m以上にわたって瓦溜まりが検出されました。調査区東側の瓦溜まりに比べると土器の出土量が多く、両者に若干の差異が認められます。瓦溜まりの下層からは遺構の痕跡が見つかりませんでしたが、瓦溜まりの範囲から想定すると、この北側に何らかの建物が存在しており、その建物が壊されたときに瓦溜まりができたのでしょうか。

これらの箇所で出土した瓦の年代から、今回検出した遺構は奈良時代後半のものと考えられます。そこで、その下層に存在するであろう奈良時代前半の遺構面についても調査しましたが、下層からは地山となる砂層が検出されるにどまり、明確な遺構面は確認できませんでした。したがって、この地における奈良時代前半の状況については不明と言わざるを得ません。

今回の調査では奈良時代だけではなく、奈良市の近代史にまつわるデータを得ることができました。それこそ、1300年間にわたる歴史の流れを垣間見た思いです。

（都城発掘調査部 林 正憲）



平成第448次調査区全景(西から)



調査区東側の瓦溜まり(北から)



「花組」と「星組」—飛鳥寺の瓦—

飛鳥寺の造営に際して、587年に百濟から四人の瓦博士が渡来したことが知られています。彼らが製作、あるいは製作の指導をした蓮華文軒丸瓦には、大きく2つの種類があります。ひとつは素弁十弁で、蓮弁端の反転を短い切れ込みで表現したもので、中金堂など伽藍中枢部から主に出土します。もうひとつは十一弁で、蓮弁が角張り、弁端の反転を丸い点珠によって表現したもので、中門や回廊から多く出土します。両者には、瓦当裏面の調整や丸瓦と瓦当の接合の仕方などにも、違いが認められます。瓦の研究者は前者を「花組」、後者を「星組」と呼んでいます。

実は、この「花組」・「星組」に対応して、丸・平瓦も二種類に分けることができます。「花組」の丸・平瓦は、赤褐色や暗褐色をしたものが主体を占め、丸瓦は玉縁部を持たない行基式です。一方、「星組」の丸・平瓦は暗灰色や灰色をしたもので、丸瓦は玉縁式です。やはり、両者には厚さや側面の加工、凸面の仕上げ方などに違いが認められます。

渡來した四人の瓦博士は、当時の百濟の都、扶余で瓦製作に携わっていたと考えられます。飛鳥寺の瓦が文様、色調、製作技法から大きく二群に分かれることは、百濟の扶余から渡來した瓦博士の技術に二つの流派があったことを示しているといえます。

(都城発掘調査部 高田 貴太)



飛鳥寺の瓦（左：花組 右：星組）

金勝寺制札の年輪年代調査

年輪年代法は、一年に一層ずつ形成される樹木の年輪幅の変動変化のパターンから、各年輪の形成された年代を一年単位の精度で特定できるので、さまざまな木造文化財の調査に活用されています。通常は、年代のよくわからない文化財を解明するのに用いられることが多い年輪年代法ですが、年輪年代と製作年代との関係などを考察するためには、年代既知の対象を調査するのも意義あることです。

このたび、栗東歴史民俗博物館の協力を得て、滋賀県栗東市の金勝寺に伝わる延徳3年(1491)の墨書銘のある制札を調査しました。この制札は、室町幕府十代將軍足利義材が二度目の六角征伐をした際に、幕府奉行人の飯尾清房と飯尾為規の連署で春日社領近江国金勝寺領家職に宛てて出されたもので、軍勢の乱入狼藉、竹木の伐採、田畠の刈取を禁止する内容が書かれています。

この制札は、原本外周付近の辺材部分を完全に取り去って製材されているので、制札に残されている心材部分の形成された年代は、伐採年よりも少なくとも数十年程度古くなることが想定されます。制札の表面で262層の年輪幅を計測することができ、このデータを近畿地方のヒノキの標準的な年輪データと照合したところ、制札に残る最新の年輪年代は1438年であることがわかりました。つまり、この制札の原本となったヒノキは、1438年以降、少なくともさらに数十年ほど後の15世紀後半頃に伐採されたことになります。制札に書かれた延徳3年の紀年銘は、この年輪年代測定結果と矛盾しません。

このように、ひとつつの調査対象を人文科学・自然科学など様々な面から考究しながら、日々研究を進めています。(埋蔵文化財センター 大河内 隆之)



延徳3年の紀年銘のある金勝寺制札

琴ノ浦温山莊園の調査から

2008年度に調査をおこなった琴ノ浦温山莊園（和歌山県海南市）は、製革業で成功した近代の実業家・新田長次郎の旧別荘です。庭園は、長次郎が大正元年から工事に着手し、主屋、茶室などの建造物を建設しつつ、昭和初期に完成に至りました。

敷地の中央に位置する主屋は、建築家・木子七郎によって設計され、複数棟を雁行型に接続した当時の別荘建築の典型的な方法を採用しています。

庭園は黒江湾に面して築造され、潮の干満によって水位が変動する池を、主屋の東と西に設けた「潮入の庭」とする点に特徴がみられます。

特に本庭園で際立った特色は、飛石、景石、池泉護岸、階段土留め縁石、庭園家具などにモルタル製の擬石・擬木を大量に用いていることです。驚くのはその量的な多さだけではなく、「大石を人工製作せむと思ひ立ち、セメントを以て試作せるに一見本物の自然石と異ならざるもの出来上がり自ら興趣を湧かしめた」と自叙伝にあるように、長次郎自身がその製作をおこなっていたことです。現在の擬石や擬木といえば、大量生産型のものばかりで味も素っ気もありませんが、長次郎はハンドメイドで丹念に製作し、本物の石と見分けがつかないくらい、きわめて写実的に模造しています。園内には紀州青石を模造したものもあり、石英が脈状に結晶した様子も造作している点は、ただ感服するだけです。

近年、わが国の名勝保護行政では当面して保護の措置を講ずべき庭園として「新しい時代の庭園」が挙げられ、また「登録記念物」としても保護措置を講ずることが可能となりました。今回の温山莊園のように、近代庭園に関する調査の必要性は今後ますます高まることでしょう。(文化遺産部 栗野 隆)



庭園池泉の擬石護岸と雪見灯籠

韓・日発掘調査交流に行ってみて

今年3月、第2回WBC大会韓国対日本の決勝戦、両国の火花が散る対決と韓国チームの底力を見せた名勝負として記憶に新しいでしょう。

この日は、私にとって韓国チームの勝利と同じくらい重要な韓・日発掘調査交流の参加中でした。この国際交流は、私ども慶州文化財研究所と奈良文化財研究所が結んだ「韓・日合同発掘調査交流協約」の一環として、2009年2月2日から3月27日までの54日間、奈文研の発掘調査に参加しました。今まで経験したことのない長期間滞在の心配と、日本文化に対する興味、そして国際交流という重圧感を抱いて日本出張の途に就きました。5週間は、飛鳥・藤原地区の石神遺跡第21次調査に参加し、2週間は平城地区の平城宮第448次調査に参加しました。途中、緊急発掘調査にも参加しました。滞在期間だった2~3月の奈良は雨の日が多かったのですが、それでも発掘調査に参加できましたし、雨天中止は飛鳥・藤原地域と平城地域の遺跡や博物館を踏査しました。そして奈文研の先生たちの案内により、施設見学と重要遺物も実見することができました。

石神遺跡の調査は、奈文研が1981年以後継続して実施しており、今回は2008年10月2日から遺跡東限とその周辺の様相を明らかにする目的で実施していました。調査担当者によると、今までの調査成果から石神遺跡は、蝦夷や隼人などの人々や外国使節をもてなした7世紀代の豪華施設と推定されているそうです。調査の結果、掘立柱建物群と堀を確認し、遺物は7世紀代の土器と瓦が大量に出土し、その中には新羅産の土器も出土していました。今回の調査によって、石神遺跡の規模は南北約180m、東西約130mと推定して、その全体を把握できるようになりました。

平城地区では、第448次調査で近代の池と溝および柱穴群などが調査されていました。参加期間中に薬師寺で雨量観測計設置に伴うトレンチ調査や、個人住宅建設に伴う調査にも2日間参加しました。

日本では発掘成果を周知させる現場説明会を開催していましたが、石神遺跡では2月14日に開催しました。説明会2日前に記者発表をして、翌日の主要日刊紙に遺跡の大略的な説明と現地説明会の日時が記事になりましたが、当日は曇天で参加者は少ない

だろうという個人的な考えは、約1600人の市民たちを見たことで変わりました。家族や友達同士が整然と並んで遺跡説明を熱心に聞き、遺跡の現状を何枚もカメラにおさめる姿が見られました。

今回、日本との交流で個人的に多くのことを見て感じることができましたが、の中でも現在、慶州文化財研究所が実施している文化遺跡整備事業を振り返るようにしました。とくに日本での遺跡踏査で本当に羨ましかったことは、薬師寺や東大寺など古代建築物と各種の仏像などが今までよく保存されているという点です。このような古代建築物の存在は、古代遺跡発掘調査に基礎的な資料を提供しており、発掘された遺跡の整備に多くの役に立つことはもちろん、幾多の観光客の誘致にも役立っているという点です。現在、慶州文化財研究所は、四天王寺・芬皇寺・月城塚字・新羅王京などの発掘調査を実施しています。日本のように古代建築物があまり残っておらず残念ですが、もう少し頑張って発掘調査と研究に邁進すれば、慶州という巨大な文化遺跡の復元に一步前進できる気がします。

奈文研の発掘調査に参加しながら、昼休みの短い時間を利用して体をぶつけあい、汗をかいて、一緒にしたサッカーを忘れることができません。多くの先生たちと友達のように親しくなって人的交流の時間を思いきり楽しんだことも、個人的な成果の一つに入れることができます。

最後に、奈文研との発掘調査交流を通して私自身を振り返るきっかけとなりました。これからも両研究所が学術的・人的交流をさらに活発におこない、お互いの長所を学んで発展する関係になるよう祈念しています。奈文研の皆さんに感謝の気持ちをお伝えいたします。

(大韓民国・国立慶州文化財研究所 金甫相、
日本語訳:都城発掘調査部 青木敬)



石神遺跡で実測作業に参加する筆者(写真左)

飛鳥資料館のみどころ（16）

復原山田寺東回廊

飛鳥資料館の第2展示室には、山田寺の復原された東回廊が展示されています。この回廊のみどころは、何といってもレプリカではなく、重要文化財に指定されている実物の部材を組み上げて復原しているところです。

山田寺の東回廊は1982年に発掘され、当時は大きな話題となりました。この東回廊は11世紀前半におきた土砂崩れにより埋もれたと考えられています。幸いにも、地下水位が高く外気から遮断されていたため、木材の腐食が最小限に抑えられ、多くの部材が奇跡的に倒壊した当時の姿を保ったまま発掘されました。

しかし、東回廊の部材が当時そのままの姿とはいえ、木材の細胞壁を構成しているセルロースを失っているために強度が低く、乾燥すると収縮してひび割れなどを生じる可能性がありました。そこで、平城宮跡にある施設に運び保存処置を施しました。

復原展示されているものは、保存状態が良好であった三間分で、皆様に間近で造営当時の迫力ある姿を御覧頂くことができます。

山田寺は舒明13年（641）に造営が開始され、天武14年（685）に完成していますので、展示されている東回廊は、現存する世界最古の木造建築である法隆寺よりも半世紀あまり古い建築様式を示していることになります。当時の最先端の建築を物語る山田寺東回廊をご覧いただき、願主である石川麻呂が生きた飛鳥時代に思いをはせてみてはいかがでしょうか。（飛鳥資料館 成田聖）



第2展示室の復原山田寺回廊

■ 記録

埋蔵文化財担当者研修

- 遺跡探査課程
平成21年 6月 2日～5日 3名
- 建築遺構調査課程
平成21年 6月 15日～19日 14名

現地説明会

- 平城宮第454次発掘調査
平成21年 6月 20日（土） 755名

現地見学会

- 飛鳥藤原第157次発掘調査
平成21年 6月 21日（日） 1,134名

平城宮跡歴史文化講座（第8回）

- （NPO平城宮跡サポートネットワークと共催）
平成21年 5月 17日（日）午後1時30分～
於：平城宮跡資料館 講堂
「地方支配の仕組みについて」
寺崎 保広 奈良大学教授

研究集会・研究会

- 東アジアにおける理想号と庭園に関する国際研究会
平成21年 5月 19日（土）～21日（月）

■ お知らせ

○平城宮跡資料館休館のお知らせ

平城遷都1300年祭に向けての改装工事のため、休館しております。リニューアルオープンは平成22年4月の予定です。

○飛鳥資料館展示

夏期企画展

- 「魅るクメール文明」－世界文化遺産 アンコール遺跡群－撮影：BAKU 齊藤
平成21年 8月 1日（土）～31日（月）

■最近の本一員の著作から

- 松井 章『ビオストーリー』第11号
「考古学の中の生き物たち」
誠文堂新光社 2009年 7月

編集「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.jp/>

Eメール jimu@nabunken.go.jp

発行年月 2009年 6月